

社会福祉法人 友愛十字会

ゆうあい

1990

8・31

No. 10

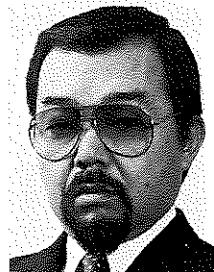
題字 前総裁 三笠宮崇仁親王殿下



自動卓上ボール盤による機械加工作業(世田谷更生館)

主な記事

- ゴルフ 総裁 寛仁親王
- 民間の福祉 監事 田崎清春
- 授産施設に思う 世田谷更生館
- 新しいホームを夢みて 友愛ホーム
- 聴覚言語障害者のコミュニケーション 東京都ろうあ者更生寮



ゴルフ

社会福祉法人 友愛十字会

総裁 寛仁親王

スコアということである。「和田はどうした?」と半ばむかつきて聞いたら「四十三回だ」という。スキーの弟子共にゴルフで負けるなどとは頭から考えていなかつたから、正直なところショックを受けた。

去る三月にサホロスキーリゾートで、全道ハンディキャップスキー大会が開催された。道内でサホロといえば三本指に入る著名なスキー場である。

大会成功的の陰に、ヤマハからセブングループの西洋環境開発にヘッド・ハンティングされた住年の名選手・湯浅栄治常務取締役のバッタップがあつた。彼は高松宮殿下を囲むスキー関係者のゴルフコンペ雪輪会のメンバーで、私の良き理解者である。

本来サホロは、大会というものを受け付けない純然たる商業ベースのスキー場であつたが、道大会だけは、我々の心意気を賣つてくれ、ワールド・カップ並の整備で迎えてくれた。

無事終了後、湯浅常務と私との間で、「素晴らしい大会だつたし、多くの未経験の人達が積極的に手伝つてくれたから、年に一回は、メモリアルディを作つて集まろうや!」という約束ができ、八月十七・十八の両日、関係者がサホロに再度集合し、メモリアルゴルフトーナメントを開催した。

サホロリゾートの関係者を中心に、地元スキー連盟、新得町々役場の人々等に交じつて、主管団体であつた帶広ハンディキャップスキー協会の会長の中尾保則と総務担当の和田直樹が参加した。中尾君は右大腿切断で一本足スキーヤーとしては世界のトップ一〇に入る実力者。和田君はマヒ系で両足に障害がある。HDCPを聞いたら、前者がプライベートハンディ三〇。後者がオフィシャル一八であるという。

従つて、一九の私は中尾君にラウンド一一を上げ、和田君からは一個もらう計算になる。

HDCP一九といふことは、O U T 四六打・I N四五打でパー三打であり、初日のハーフラウンドで、初めてのコースなのに私は割合調子良く、四十六回で回つて來たので、よしよしと思つていた。

翌日の本戦に備え、練習場で点検をしているうちに、後続の二人が上がって来た。気持ち良くならかに「どうだった?」と聞いた。中尾曰く「四十六回でした!」「なに? どういう意味だ?」と眞面目に再確認したが、要は私と同じ

私が推し進めてきた、あらゆる分野で、健常者と五角或は乗り越えていつて欲しいという長年の願望が、着々と実現している事実を見て、二十年前我々が福祉の道を選択した時の基本的構想は間違つていなかつたことを再確認したメモリアルゴルフトーナメントであった。

民間の福祉

監事 田崎清春

この四月に七年間勤めた長寿社会開発センターを退職し日本身体障害者団体連合会に勤務することになり、仕事も老人から身体障害者に、勤務地も霞ヶ関から早稲田と変わつていろいろ感ずることがある。

まず現在の建物は、一部で実際に治療訓練を実施しているため、障害を持つ子供やその母親の出入りも多い。ときにはエレベーターを降りると、一歳ぐらいの幼児が手をさしのべて待っている、思わず私も手を出して握手する。朝も廊下で「お早うございます」という言葉が自然にかかるようになってくるのも嬉しいもので、しばらく忘れていた福祉の現場の雰囲気を感じている。

福祉の仕事は、友愛十字会の実績を見ても分かるように、そこに経済をはなれた福祉だけの考え方と努力があり、その善意と努力に対しても一般から寄付金や奉仕などの支援があつたものである。その後財政も豊かになり公的福祉が伸

びてきて、民間にも公の委託事業が多くなってきた。そのため先駆的な本来の民間福祉事業の影が薄くなつたようと思う。

また最近の急激な変化を考えるとき、私達も福祉の中だけを見てはならない。在宅福祉は老人が生まれ育つた土地を希望しているからという。しかし聞くところによればこの世田谷区でも地代家賃の高騰のために、若い世代が郊外にはげしく移動しているという。こんな状況の中で事情を知らない老人の希望だけで、事を進めていてよいのどうか、もっと積極的に厳しい現実を老人に知らせて解決を図らなければとも思う。もうわが国では住み慣れた土地ではなく、住み良い土地を求めて移動せざるを得ない時代に変わつていて、福祉が情緒にながれ理想を求めすぎていては、現実に遅れて後追いになつてしまふ。

今回の改築でも分かるように、福祉も財源の必要な時代になつた。しかしこの仕事にはお金では解決できないことが多い。あの有名な西ドイツの障害者の町ベーテルで、外国から巨額の寄付の申し込みがあつたとき、「われわれの必要

なのは巨額のお金ではなく、市民の一人一人の心の灯である」と言って断つたという話、そこにも一般社会にはない福祉の伝統の重みを感じる。また福祉にたゞさわる者として、困難を乗り越えて努力する障害者、それを真剣に支援する職員の姿は、単にその施設だけのことではなく、これを見る一般市民の心に与える感銘が、その地域の財産であり文化であるということも忘れてはならない。

十年後の戦略など福祉は大きく進展しようとしている。しかしこれが実現のためには、市民が不安に思つてゐる今日的課題への真剣な取り組みが大切である。ここでも公的施策の一歩前で、時事刻々発生する社会の問題を、個々の事情に応じて、弾力的に対応する民間の善意による活躍への期待もまた大きい。

友愛十字会も関係者の努力により、今回全面改築されるが、わが国における福祉の草分けから今日まで四十年間の友愛十字会の歴史は、他所でどのように努力しても作れない貴重なものである。どうかこのことを心に刻んで、より良い歴史を積み重ねていただきたいと思う。

(社会福祉法人 日本身体障害者
団体連合会 事務局長)

授産施設に思う

世田谷更生館

三十五年間働いてきた企業から、社会福祉施設の一つである身体障害者授産施設に身を投じて一年がたつた。この一年間で感じたことを述べてみたい。

身障授産施設の目的とするところは、「身体に障害を持つ人達が職業を身につけて、社会に復帰すること」である。現状では企業の受け入れが容易ではなく、長期間施設生活を余儀無くされる人達がほとんどであるが、それでも、授産施設としては、家庭の機能を持つ施設というより、やはり職場としての考え方を強く持つべきであると私は思う。

企業では社員、授産施設では利用者と言い、入社や入所の手続き、作業方法などは違っているが、自分が希望する職業の中で将来の生きがいを求めようすることは、人間としての原点であり、なんら変わることはない。企業においても授産施設においても、個人のキャリアなどをどのように活用し、成長させるかが発展の鍵になるであろうと思う。ただ、企業と施設の大



施設外実習

きな違いは、職業人としてなすべき前工程のシステム評価、判定方法である。企業では必要とする人物を厳選して入社させ、判定をした上で、その職場に合

が、職業能力の開発については簡単過ぎるよう感じられる。改善策としては、利用者を入所前の職種判定で、単に指導員の感覚で職場に組み入れるのではなく、一定の訓練期間を設けるか、又は職種科目別に定期実習をさせるという方法も考えられる。そのため、実習担当専任指導員を配置するなどして、身体機能を始めとして、体力の持久性、職種的潜在能力を引き出すような、定期間の個別的技能訓練を実施してから、専任指導員の評価等を基にして、配置

う人物をプールして分類化方式で訓練教育を実施する。その期間の日数もグループ毎に計画を定めて行っている。さらにその期間中に、会社が要求している職種機能的標準との比較値をとらえて再編成グループをつくり、三ヶ月間の専門職種訓練を経て職場配置を行う。この訓練教育に当たる指導管理者は、すべてにプロ意識をもつて、自己の最善を尽くして職務達成を誠実に行っている。社員はその職場においては、部門方針、自己目標管理などによって従事し、組織的なバックアップによつて成長していく。

これに対し、授産施設では、職業訓練で要求される心身機能に関する事だけが中心として評価・判定されており、特定の職業種目に適用される職業評価に関する要素が希薄のように考えられる。この点については、あらゆる方向から評価し、利用者の能力、適職性を見出すために創意工夫して、真剣に取り組むことをこれららの課題にすべきであろうと考える。生活や医療に関しては詳細に計画を立てて実施している

会議で職種科目を決定する方法も検討する必要がある。また、訓練実習中の工賃は、特別な支給基準を定めて支給することとし、訓練用の作業材料は、特別に教材用として予算を組み、その中から供与するような方法で運用すればよいと考える。

最後に感じたことは、企業と授産施設の間にかなり大きい格差があるようと思える。一つには資金力の差であり、施設では近代的設備が整備できないために、付加価値の多い生産が得られないし、業種転換も簡単にできない。いま

一つは、社員（指導員）の職業的専門技術力の問題があるように思う。現実の問題として、職業指導員の資格基準等が明確でない今日、これを企業のプロと同一視すること自体困難であり、また、そうした面が利用者の能力開発や社会復帰を遅らせている一因となっているような気がする。企業と対等に付き合う姿勢についても、営業技術、生産性プロセスなどの力不足があり、現時点においては早期に解決することは難しいであるうが、考えなければならぬことであると思う。

授産施設には職業技術を習得しようとする利用者がいて、指導員がいるという相互の立場をよく弁えて、共にこの道を選んだことの初心を忘れてはならないと思う。

新しいホームを夢みて

友愛ホーム

みにするようになつた。
十一月二十五日に完成したが、完成してみると見違えるよう奇麗になり、今迄の不安は一掃され、皆んな大喜びあつた。そして十一月二十八日から旧ホームから仮住いへの引っ越し始まつた。引っ越しといつても九十名という大世帯の引っ越しである。それに食堂や娯楽室等の什器備品もあるので、その量は膨大なものであった。全部終了したのが十二月十五日であつたがこの間の十六日間は、職員にとつて悪戦苦闘の毎日であつた。そして、やつと新しい仮住いの生活が始まつたわけである。この居室は、大半が六人部屋であり、前より少し狭くはなつたが、壁も畳も新しく、テレビも各室に置くことができたので、お年寄りたちは満足げであった。しかし、反面無人となつた旧ホームをみると、老朽したとはいえ昭和四十一年から二十四年間も住み馴れた建物であつたので一抹の寂しさを感じた。

こうして無事移転が終了したが、我々職員はほつとすると間もなく、新ホームができるまでの間、仮住いの中で今まで通りの利用者待遇を維持していくために、これまで考えてきた最善の方法を実地に移すことであつた。

（指導部長 武田次男）

聴覚言語障害者の コミュニケーション

—施設における実態調査概要—

東京都ろうあ者更生寮

調査のあらまし

聴覚言語障害者更生施設

施設での本日細かい処遇には利用者との十分なコミュニケーションが必要不可欠です。しかし、重度重複の聴覚言語障害者はまさにその点がハンディキャップなのです。更生寮では、

聴覚言語障害者の専門施設という性格上、職員は手話をはじめとする必要な方法を習得し、

または習得しようと努力しています。ただ、手話をさえ覚えればいいと言うものではなく、日々の処遇に苦慮するケースがあり、この点の施設機能の強化を目的として、全国の身体障害者施設ではどのように聴覚言語障害者に接しているのだろうか、お互いの情報を交換出来れば……と、アンケート調査を行なうことになり、先日完成いたしました。対象となつたのは次の各施設です。

重度身体障害者更生援護施設
身体障害者授産施設

重度身体障害者授産施設
身体障害者通所授産施設

身体障害者福祉工場

(表 I) 聴覚言語障害者の在籍割合

	入所中	いない	無回答	合計
重身障更生	27	18	5	50
身障授産	55	16	1	72
重身障授産	74	21		95
身通所授産	12	3		15
身福祉工場	15	1		16
聴言更生	2			2
全 体	185	59	6	250
比 率 (%)	74.0	23.6	2.4	100

ただ、施設定員と比べて実際に入所している聴覚言語障害者の人数を見ると、全体の七・五%程度で、小数派になつている傾向が伺えました。

また、利

用している

人たちの障

害程度では

一級、二級

の重度者が

八三・一%

を占めてお

り、さらに

聴覚言語のみならず、

視覚障害者

全国三〇三の施設にアンケートをお願いし、二五〇施設から回答を頂きました。回答率八二・五%は、この種の調査では高い数字であり、そしてこのうちで聴覚言語障害者を受け入れている所は一八五施設(七四%)でした(表I)。過半数の施設が聴覚言語障害者を受け入れていることになります。

ただ、施設定員と比べて実際に入所している聴覚言語障害者の人数を見ると、全体の七・五%程度で、小数派になつている傾向が伺えました。

各施設に対して、手話の出来る職員の有無を調べてみたところ、過半数の施設に手話の出来る職員がいました(表II)。手話の出来る職員がない施設の方が少ないという結果でした。
『B君は、時々無断で外出し、行方不明になることがあります。その度に職員はあわてて心当たりを探し回り、家族に連絡したり、警察に捜索願いを出したりします。そんな職員の心配をよそに、ある日ひよっこり帰ってきます。当然、無断で外出しないよう厳重に注意するのですが、なかなか通じません。どこまで理解しているのかなあと職員は不安で仕方がありません』

筆談はもちろん、標準的な手話をさえ会得する機会がないまま成人した人と、生活の中で起こ

精神薄弱などの障害を重複して持つ人もかなりの数に上ります。この人たちを、重度身体障害者授産施設・身体障害者授産施設・身体障害者通所授産施設の三授産施設にて全体の八五%を受け入れていました。

(表Ⅱ) 手話の出来る職員の有無・施設数

	いる	いない	無回答	合計
重身障更生	20	18	12	50
身障授産	40	23	9	72
重身障授産	51	36	8	95
身通所授産	9	5	1	15
身福祉工場	13	3		16
聴言更生	2			2
全 体	135	85	30	250
比 率(%)	54	34	12	100

る様な問題について話し合うことの困難さ。このことに関してもアンケートを取ったところ、各施設でも同じ様な悩みを抱えています。一番多かったのは、本人がどこまで理解したかの確認が取れることでした。そしてこれは、手話の出来る職員がいるいないに関係なくトップであります。そして誤解が多い、読み書きや社会常識の不足、集団での生活に不安があること等と続いています。

一方、入所者とどのようなコミュニケーション方法を取っているかの質問に対しても、手話の出来る職員のいる所では手話と身ぶり、筆談の順となり、いない所では筆談、身ぶり、口話(口を読み取り口で話す)の順となりました。当然と言えば当然ですが、これはある意味では職員の能力にコミュニケーションが限定されてしまうとも言えるでしょう(表III)。

生活の中で、コミュニケーションが密であるほど、様々な人間関係も密になると見えます。この

(表Ⅲ) コミュニケーション方法・人数 (人)

	手話	身振	筆談	口話	他	絵	不可	合計
重更生	5	21	20	19	11	3	2	81
身授産	338	231	141	105	37	44	49	945
重授産	128	179	153	116	16	14	8	614
身通所	14	14	14	8	4	3	4	61
身福工	32	21	22	24	1		1	101
聴言更	44	44	1	1				90
全 体	561	510	351	273	69	64	64	1,892
比 率(%)	29.7	26.9	18.6	14.4	3.6	3.4	3.4	100

いうことは、直ちに特効薬ということにはなりませんが、少なくとも密度の濃い関係を築くことには大いに効果があるのでないか、特に利用者が手話を知らず、身ぶりでコミュニケーションを得ない場合でも、手話を知っているといないとでは身ぶりの仕方も変つてくるだろうし、更に詳しく調査する必要性を感じたものです。

現場の声

今回の調査では、各施設で聴覚言語障害者に日頃接している職員の方々に、どのような方法で接すれば良いかと尋ねたところ、様々な意見や疑問、要望などを頂きました。それらはすべて原文のまま報告書に集録しています。利用している聴覚言語障害者に対する処遇上の悩み、ろう教育に対する疑問、他施設との情報交換の必要性、実際に行なつてある処遇方法、等々が綴られた貴重なものです。

総じて、聴覚言語障害専門施設ではないことから来る、処遇上の戸惑いが多く、いかにすれば本人のためになるか、行き詰りを感じながらも日々摸索を繰り返している様子がありありと読み取れました。

一未就学者の中には自分なりに手話を学び、疎通も可能な者もいるが、反面、意志表示もまことに知らない者も多い。そういう者に対しても、ごく簡単な絵を使って説明したり、また身振りで繰り返し疎通に努めています。

一職員はある程度の解釈が出来るが入所生は手話でしか話をしないこの者に自分から近付こうとしないので疎外感を覚えて悪口を言つたりしてよけいに孤独に陥つてしまつた。以上のようないふしがありました。

数字では表わせない、職員の生の声を集録できたことだけでも今回調査の収穫があつたと思つており、今後の指導面で生かしていきたいと考えております。

(生活指導員 小海秀純)

ます。この点から見て興味深いのは、本人との対応で困ることの回答が、手話が出来る職員のいる施設の方から多く寄せられたことです。

このことから、手話ができると身振りで繰り返し疎通に努めています。

未就学者の中には自分なりに手話を学び、疎通も可能な者もいるが、反面、意志表示もまことに知らない者も多い。そういう者に対しても、ごく簡単な絵を使って説明したり、また身振りで繰り返し疎通に努めています。

職員はある程度の解釈が出来るが入所生は手話でしか話をしないこの者に自分から近付こうとしないので疎外感を覚えて悪口を言つたりしてよけいに孤独に陥つてしまつた。以上のようないふしがありました。

数字では表わせない、職員の生の声を集録できたことだけでも今回調査の収穫があつたと思つており、今後の指導面で生かしていきたい

戦車道路で見上げる桜

友愛荘
中丸忠光（71歳）

春本番の三月二十七日、友愛荘ホームへ入所して以来、初めて私は、皆さんと一緒に、桜の花見に出掛けました。お天気もよく暖かく、久しぶりの花見に心を躍らせながら、車に乗った。車の着いた所は、「ここは戦車道路（町田市と多摩市の境界線上にある）よ」と寮母さんから聞かされた。私は、大変驚いてしまつとともに、五十年前のことが、しきりと思い出された。今は、桜並木に変わっているものの、その当時の戦車道路は、勿論戦時中であり、ピカピカの新しい戦車を造り上げては、この道路を走らせて、いろいろ走行テストをしたり、試運転をしていった。その頃、近くの町田市下小山田町に住んでいた私は、十五六歳位で、立派な戦車の勇敢な姿に、うつとりと見とれて、一度は是非乗つてみたいと思つたものである。

昭和十五年、私は満洲のチチハルへ渡り、明石部隊へ現役入隊した。町田から渡満入隊した仲間は、たつた二人で、私と小山さんという人だつた。所属する班は違つても、同じ部隊だつ

た。この明石部隊は、迫撃砲部隊で、毎日、激しい訓練が続いた。教育の終つた六ヵ月後には中国北支に転属し、そこでも、毎日、討伐作戦に明け暮れていた。

ところが一転して、昭和十七年には暑いシンガポールに上陸し、ジョホール・バルという所で、一年ばかり駐屯した。無論、小山さんも一緒だつた。現地は、満洲と異なり、暑くて暑くて私にとっては大変すごしくらいの所であつた。

片田舎の道端には砂糖きびの入つた大きな袋があちこちに転がつており、それを中国人が拾つてきては、現地の人々に売りつけて商売しているようであつた。

さらに、昭和十八年には、スマトラ島へ移動した。このスマトラも平地は暑く、高地は寒くこれまた、シンガポール同様、すごしくらい所であつた。ここに三年間駐屯したが、この間に私はマラリヤに罹り、高熱に苦しむ日が続いた。

幸いにも、どうにか無事回復することができた。昭和二十一年六月だつた。なんと、六年八ヵ月であつた。ここに三年間駐屯したが、この間に私はマラリヤに罹り、高熱に苦しむ日が続いた。

あれから四十年余りの歳月が経つた。外地でのあれこれを、昨日のことのようと思い出す。……今は、平和が有難いものであると、つくづく感じている。

今、戦車道路の桜の花を見て、本当に幸せを感じている。一緒に戦地へ出向く、そして、「亡くなつた戦友のこと、戦争のことは、死ぬまで決して忘れるとは出来ないと思う。出来れば元氣で来年も再来年も桜見物をし、そして感謝をしながら生きてゆきたいと思う。

（聞き書き 友愛荘寮母 村上敏枝）

仲間と一緒に、ジャングルに入りこんで、ヘビを捕えたり、鳥や、ワニの肉まで食べるなど自分の食糧を見つけるだけで精一杯であつた。今思えば、大変なものを食べていたものだと、つくづく思う。よく、そのようなものを口に入ることが出来たものと、我ながら、感心する位で、当時は、必死だったのだろう。それを食べてでも全然平氣だったのである。

スマトラでは守勢一方で、爆撃の激しさに身動き一つできず、ついに、スンパワ島で終戦を迎えた。がすぐ帰国できず、一年程捕虜のような生活が続いた。その時の通訳が日本人で、確か福島県出身の方だったと記憶する。よく遊びにきては、いろいろな話をしてくれた。その方の尽力のお蔭で、無事に復員することができた。昭和二十一年六月だつた。なんと、六年八ヵ月ぶりの外地からの帰還であつた。

あれから四十年余りの歳月が経つた。外地でのあれこれを、昨日のことのようと思い出す。……今は、平和が有難いものであると、つくづく感じている。

今、戦車道路の桜の花を見て、本当に幸せを感じている。一緒に戦地へ出向く、そして、「亡くなつた戦友のこと、戦争のことは、死ぬまで決して忘れるとは出来ないと思う。出来れば元氣で来年も再来年も桜見物をし、そして感謝をしながら生きてゆきたいと思う。

花札とおばあちゃん

友愛荘安井テルさん家族

金井皓二

おばあちゃんは無類の花札好きである。皆様のお蔭で五月の連休中久々に外泊をしたおばあちゃんの花札の生活記録を御紹介したい。

第一日（四月二十九日）十一時友愛荘を出発。一時過ぎに我家へ到着。直ぐに花札の誘いを次女（58歳）に電話する。おばあちゃんのお誘いとあらば何を置いても参上する事となつた。『あの子も花札は好きだから言えば直ぐ来るよ』……とはおばあちゃんの弁である。久し振りにおばあちゃんを囮めで賑やかな夕食をした。然しおばあちゃんは花札の事が頭から離れないらしい。食事の後片づけにモタモタしている連中に『早く始めよう』とハッパをかける。花札開始が九時。俄然おばあちゃんの声が大きくなり別人の如く生き生きとなる。何んと二人の我子を相手に延々夜中の二時まで花札が続く。当日の戦績はおばあちゃんの一人勝ちであった。お風呂に入つて医務室から貰つた睡眠薬をのんで、床についたのが夜中の二時である。とても九十一歳のおばあちゃんとは思えない。子供達が老人の身体を気づかう気持はどうへやら、あと一回あと一回で時間が過ぎた。五十代の我が子を相手に對等の勝負である。どこにあるエネルギーがひそんでいるのであろうか？

第二日。朝食もそこそこに第二戦の御開帳である。次女が三時に帰らねばならないとの事で、

寸暇を惜しんで花札に熱中する。ちなみに昼食は抜きである。戦闘終了二時三十分。前日のハードスケジュールが祟つたものか、おばあちゃんの一人負けだった。

第三日。おばあちゃんが来ているとの知らせで孫娘が訪問してくれる。車椅子でデパートを廻つて買物。後は家でゴロゴロと寝て過す。

第四日。ゆっくりと起床。さすがに『年のせいか花札をして根気が続かないよ』と言つていたが、あれだけのパワーが出ると若い者もい加減なお付合では勤まるものでない。遅めの昼食ののち家を出発。友愛荘到着は四時半だった。皆さんに暖かく迎えられる。部屋の方達も『帰つて来た、帰つて来た』と迎えてくれた。そして一瞬和んだ雰囲気に私達もホッとする。

早いもので友愛荘にお世話をなつて六カ月になる。思えば次女がおばあちゃんの世話で過勞となり、せつぱ詰つた状態だつた。区役所の福祉課の方と相談しながら東奔西走の毎日だつた。あの日も会社を休んで朝早くから施設をみて廻つていた。どこへ行つても同じように満杯で、『もう今日はこれでやめよう』今更乍ら施設へ入る難しさをつくづくと思い、絶望感の中でぼんやり考え乍ら遅い昼食をとつた。然しつとなく福祉課で紹介された友愛荘の地図をみて『もう一軒だけ訪問してみよう』と言う気持になつた。若しあの時友愛荘を訪問していなかつたら……。

恐らく現在の私達の生活は変つていただろう。おばあちゃんが窓からみた桜の花はどんな色に映つただろうか？ 友愛荘の皆さんの温かいお世話の中で又来年もとびきり美しい花の色がみえるようおばあちゃんも生活して貰いたいと念じている。

な運営などなど……。そして庭にある桃や桜を見て、さぞかし春は素晴らしい花がみられるのではと想像した。施設内見学後の面談では、思案投首の私をみて寮母長さんから病院までお世話をいたいた。直ぐに訪問した病院も又私の考えをはるかに上廻る素晴らしい内容だつた。あの日の午前と午後を境に私達の生活も變つた。早速入院の手続きをすませ、まずは安住の地を得てホツとした。この時から友愛荘は私のただ一つの目標となり、あんな施設におばあちゃんをお願い出来ればとの気持が日増しに強くなつた。然しお話を伺うと増え実情は厳しくまさしく人園は高根の花だつた。一方病院生活も三ヶ月を過ぎる頃、『半年経つたら一度退院して下さい』と言われた。当初からそんな話は聞いてはいたが、現実の厳しさが又近づいて来ることとなつた。そんな或日、区役所からの連絡で『若しかしたら友愛荘に入れるかも知れない』との話があつた。正に晴天の霹靂だつた。園長始め関係者の皆さんのが私達の実情を察して、福祉事務所の方と協議しながら、決めてくれたのである。何んでもいい、免に角現実の入園は私にとつて信じられない思いと感謝の気持で一杯だつた。今年の春の私のみた友愛荘の桜は想像通りのものだつた。桜の花の色は七色に変ると言う。花をみる人の気持ちの持ち方で同じ桜も微妙な色合で変化があるのだろう。おばあちゃんが窓からみた桜の花はどんな色に映つただろうか？

